

# 史跡諏訪原城跡保存整備

# 復元検討委員会資料

## 説明資料

1.	諏訪原城の概要	1
2.	二の曲輪北馬出の位置と整備の目的	2
3.	復元検討委員会の経緯と発掘調査結果	3
4.	土塁と土塀の設計方針	4
5.	土塁と立体工作物の整備（案）	5

## 1. 諏訪原城の概要



諏訪原城絵図面（島田市博物館蔵） ▲諏訪原城跡遠景 ▼諏訪原城位置図

### ● 史跡指定

昭和 50 年 11 月 25 日

平成 14 年 12 月 19 日

指定総面積 113,305 m<sup>2</sup>



### ● 指定理由 (S50. 11. 25)

諏訪原城跡は、大井川右岸の牧之原台地の北部、戦国時代の東海道における戦略上の要地に位置する。はじめ武田信玄が城郭を築いて、徳川に対する備えとし、天正元年（1572年）にその子勝頼によって大規模な修築が加えられたが、現在その修築時の堀、土塁、丸馬出が遺存している。この城跡は、後世の軍記等に「名城」とうたわれた雄大な規模を今日に伝え、武田流の築城術や軍略をうかがい知ることができるばかりでなく、織豊政権立までの戦国時代の過程を理解するうえで見逃すことのできない重要な遺跡である。

### ● 追加指定理由 (H14. 12. 19)

天正3年（1575）に徳川家康が攻略し、その後大改修を行った。徳川氏によって改修、拡張された部分の一部を追加指定する。

### ● 諏訪原城の歴史

天正元年（1573）、武田勝頼は遠江侵攻の拠点とするために、家臣の馬場美濃守信春に命じて牧之原台地に城を築いた。

天正3年（1575）、徳川家康によって攻め落とされたのち、牧野城と改名し、城番をおいて駿河に対する最前線拠点とした。又、併せて1年間にわたり駿河の前国守今川氏真をおいて駿河進攻の旗印とした。城番であった松平家忠が記した「家忠日記」には、武田氏との攻防戦や、彼が城番のたびに行った普請にかかわる記述が散見できる。特に普請に関しては「普請」「番普請」「牧野市場普請」「堀普請」「堀普請」という表現で、天正9年の高天神城落城後まで記されており、牧野城が徳川氏によって長期間にわたって大改修されたことがわかる。天正9年（1581）に、高天神城が落城し、翌年、武田氏が滅亡するこの城の必要性はなくなった。その後、徳川家康が関東に移ったことから、天正18年（1590）頃廃城になったと言われている。

### ● 諏訪原城の特長

#### 一、武田流築城術の典型の城

攻撃のために備えられた三日月堀と曲輪（平坦地）がセットになった大きな「丸馬出」が残っている。発掘調査により徳川氏によって改修された可能性が大きいことがわかった。

#### 二、地形に守られた「後ろ堅固」の城

大手（表口）側は平坦だが、本曲輪東側が断崖絶壁で、当時、城の眼下を大井川が流れる自然地形によって守られていた。

#### 三、街道と密接に結びついた城

東海道が城域内を通過し、東西交通の要衝の地に築かれた城である。

#### 四、縄張の傑作の城

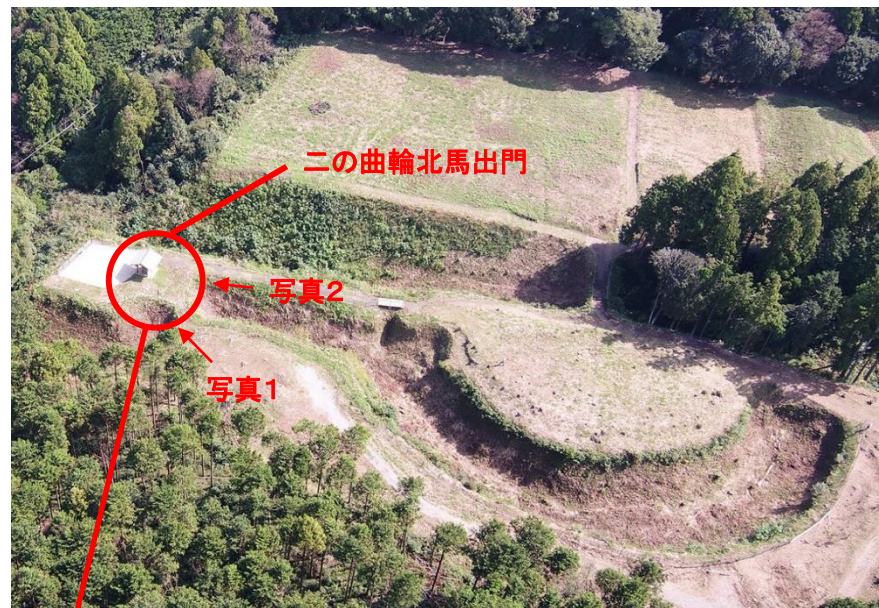
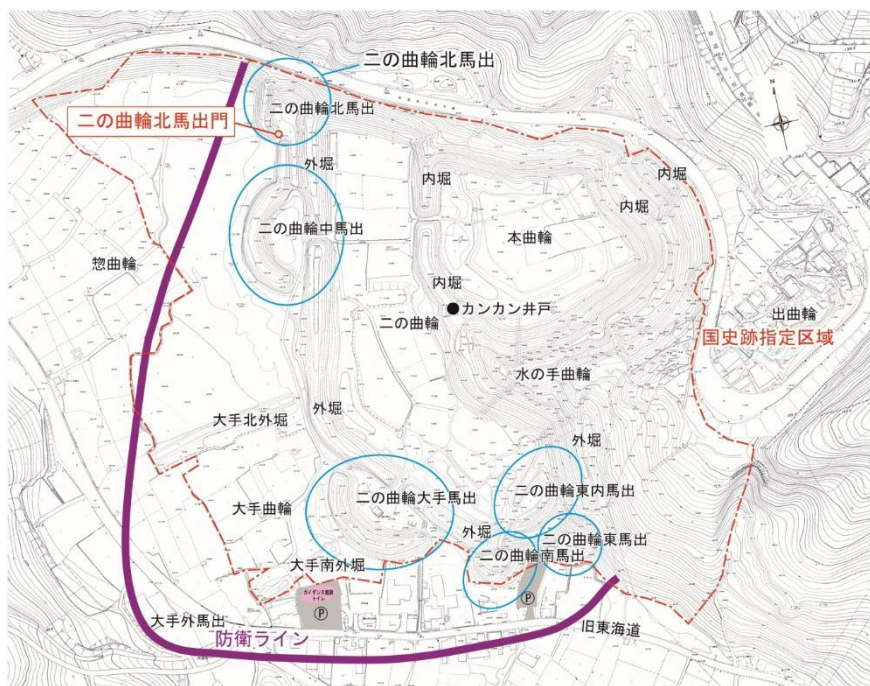
本曲輪を扇の要（かなめ）にたとえ、扇状に曲輪が広がっていることから、のちに扇城とも言われるようになった。

## 2. 二の曲輪北馬出の位置と整備の目的

### ● 二の曲輪北馬出周辺の整備の目的 『諏訪原城跡整備基本計画』平成22年度より

諏訪原城は土塁や曲輪、壮大な空堀が特徴の守り強固な城である。

また、二の曲輪北馬出は、発掘調査により、門を含めた曲輪の構造が唯一把握できた場所である。そこで戦国期の防御構造が判明する貴重な事例と判断し、二の曲輪北馬出の門を含めた土塁等の整備により、その機能をわかりやすく見学者に伝えることを目的とする。



### ● 二の曲輪北馬出の位置

諏訪原城は、西側台地から敵が攻めてくることを想定し、二の曲輪外堀の外側に大小6つの馬出をもうけて、強固な防衛ラインを形成している。二の曲輪北馬出は、最北端に位置する。



写真1 惣曲輪側から

写真2 通路から

二の曲輪北馬出門

### 3. 復元検討委員会の経緯と発掘調査結果

#### 平成 24 年 12 月 26 日 復元検討委員会

二の曲輪北馬出の門を最初に整備する意義、検出された門の礎石からの復元案を提示した。東側土塁の土塀については、残存する土塁跡に茶の木植栽による立体工作物案を提案した。しかし土塁上の立体工作物については、植栽以外の案を検討するよう指導があり、門及び土塁と土塁上工作物の実施設計を取り止め、堀のみを整備する内容に変更した。

#### 平成 25 年 3 月 27 日 復元検討委員会

門の復元が承認された。土塀の表現方法については、重ね馬出（二の曲輪東内馬出・二の曲輪南馬出・二の曲輪東馬出）の発掘調査の成果を基に、改めて検討するよう指導を受けた。



平成 25～27 年度にかけておこなわれた重ね馬出の発掘調査では、土塀の復元及び復元的整備に値する土塁上の遺構は確認されなかった。

平成 28 年 3 月、二の曲輪北馬出の城門のみ復元が行われた。

#### 平成 31 年 3 月 22 日 復元検討委員会

土塀の復元的整備をするには、更なる復元根拠資料の提示が必要であること、また、土塀を復元的整備ではなく、転落防止柵のような立体工作物として整備することも可能との意見をいただいた。

#### 現在の状況

現在は、城門（薬医門）が復元されているのみで、城内・城外の区域が全くわからない状況である。また見学者は、北馬出に土塁や土塀の立体工作物がないので、城外から侵入してくる敵の視野や立体的構造がイメージできず、二の曲輪北馬出の防御・攻撃機能が理解できない状況である。

#### ●二の曲輪北馬出の発掘調査

曲輪西側のL字形の土塁が検出され、土橋方向に対して横矢が効き防備を強固にする造りであることが判明した。また中馬出に続く通路の一部でも土塁の基底部が確認された。しかし、土塁の上部が削平されていたため、土塁上の構造は不明である。



二の曲輪北馬出遺構図

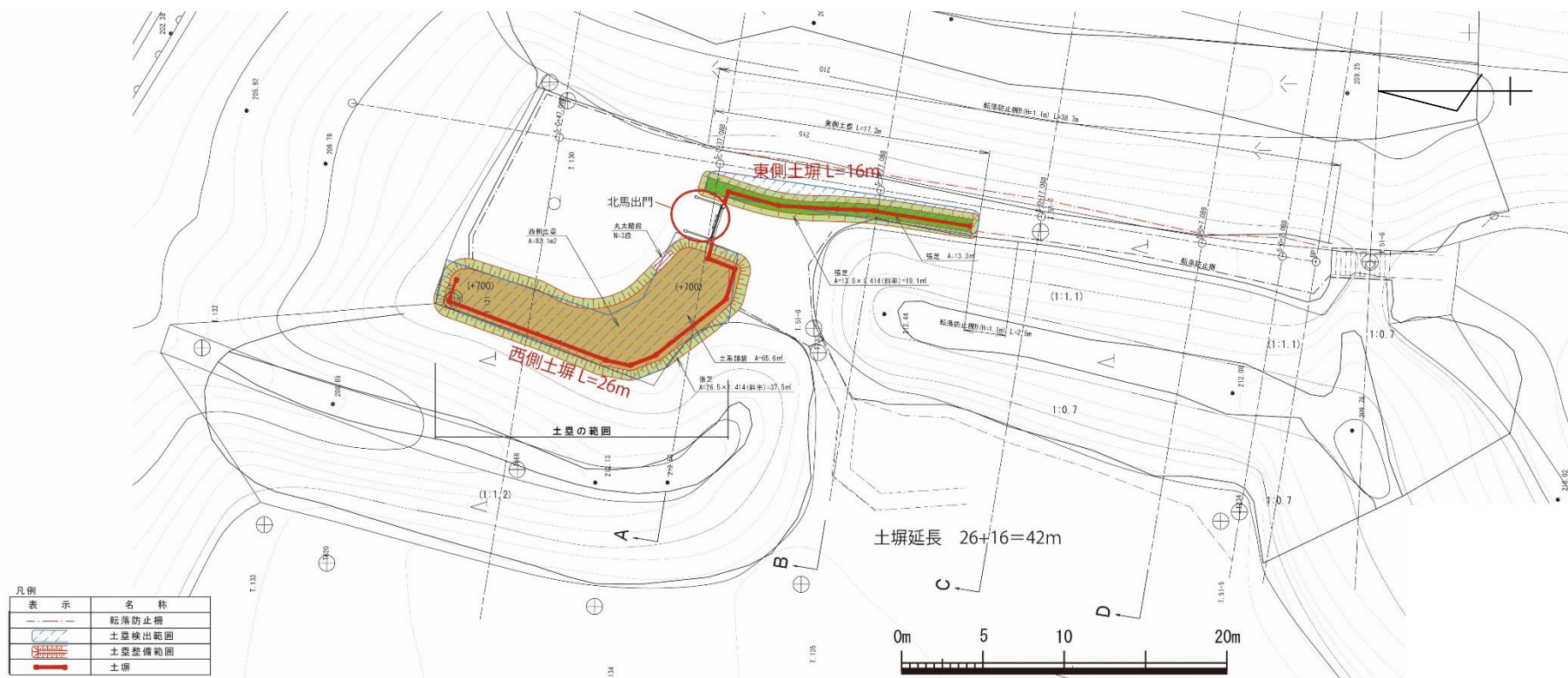
## 4. 土塁と土塀の設計方針

### ●土塁と土塀の設計コンセプト

二の曲輪北馬出は、城の最前線に設けられた馬出の中でも、徳川氏が武田氏の遠江侵攻に対して感じた危機感を最も感じ取ることのできる場所である。天正3年から天正9年の間の緊迫した社会情勢や戦の臨場感を、良好に残る大規模な堀とともに来訪者に広く理解していただくためには、平面表示や説明看板による解説ではなく、視線を遮蔽する囲柵による馬出の防御機能そのものの体感が最も効果的であると考え、土塁と土塀の設計方針を以下のとおり設定した。

### ●設計の基本方針

発掘調査で確認された土塁の基底部をもとに、門の西側、東側にそれぞれ土塁を立体復元表示し、その上部の土塀が想定される位置に、立体工作物として塀を設置する。



二の曲輪北馬出土塁と土塀の配置図

## 5. 土塁と立体工作物の整備（案）

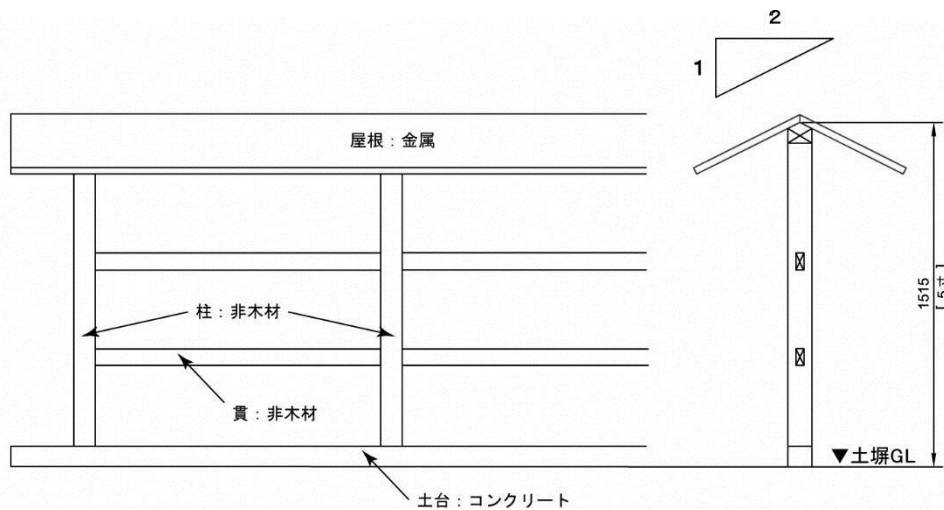
### ●立体工作物としての塀の整備

土塀が想定される位置に、現代的素材で立体工作物の塀と屋根を設置する。

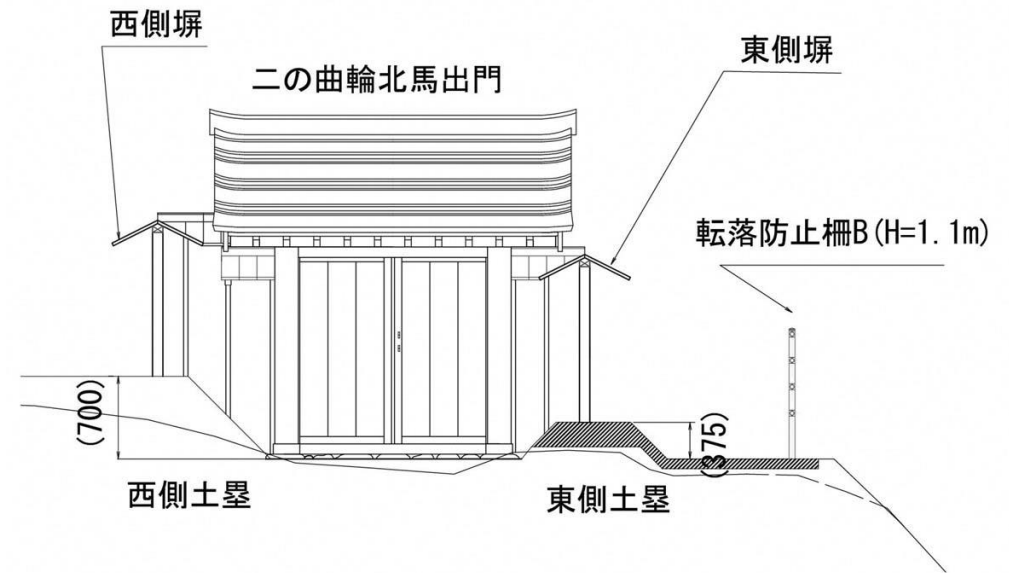
塀の基礎はコンクリート基礎を盛土に埋め込み設置する。基礎の構造については今後検討する。土塁遺構上には盛土を行い、その上に基礎を設置するため、遺構が保護できる。

現代的素材を使用するため、見学者が当時の雰囲気を理解しにくく、復元した門との調和がとれないというデメリットが存在する。一方で、土塀の骨組みを理解することができ、塀が転落防止になるため安全対策に有効である。

塀には、現代的素材の骨組みを設置する。柱の間に取り付ける貫は転落防止の役割も果たす。



立体工作物としての塀の立面・断面イメージ図



門と塀の取り付けイメージ図